

## 74. 近江の弥生時代銅鍬

### 1. はじめに

近江における銅鍬はこれまでに、12遺跡、70数本が出土している。その過半数は、安土町瓢箪山古墳<sup>①</sup>(30本)、草津市追分古墳<sup>②</sup>(10数本)、志賀町大塚山古墳<sup>③</sup>(5本)の3古墳の副葬品として出土している。古墳以外では、特に弥生時代遺跡からの出土数は極めて少ないのであって、このことは近江においても例外ではなく、以下に紹介する9遺跡においても、1本あるいは5本程度の出土数である。ただ、余呉町桜内遺跡において、これまで12本もの銅鍬が出土しており、今後、弥生時代銅鍬の性格を知る上で、重要な位置を占めるものと考えられる。

### 2. 守山市服部遺跡<sup>④</sup>

近江では最南部の銅鍬出土遺跡である。畿内第Ⅳ様式及至第Ⅴ様式に相当する土器類を伴って出土したといわれる。逆刺のよく発達した二等辺三角形形状のものが3点、逆刺の小さいものが2点で、ともに有茎である。当遺跡からは、多数の磨製及び打製の石鍬は出土しているが、鉄鍬は出土していないようである。

### 3. 安土町大中ノ湖遺跡<sup>⑤</sup>

最も早い段階で見えられた水田遺構や豊富な木製品等を出土したことで著名な遺跡である。当遺跡からは、100本前後の石鍬とともに5本の銅鍬が出土している。有茎鍬で、逆刺は小さい。明確な遺構に伴わないが、畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅲ様式までの土器類が出土しており、銅鍬としては、古い段階の出土例である。

### 4. 米原町入江内湖西野遺跡<sup>⑥</sup>

1点のみ出土している。長さ4cmで、鋳型のずれが見られる。矢倉川中小河川改修工事に伴う発掘調査により出土したのであるが、やはり、包含層からの出土である。調査では、3層にわたり、層位的に遺物を採集したが、銅鍬は、攪乱を受けている最上層から出土しており、時代を限定することはできなかった。また、弥生式土器としては、第Ⅰ様式以降のものが出土している。

### 5. 長浜市大辰巳遺跡<sup>⑦</sup>

工事中の発見であるが、その際の詳細な観察及び以後の整理調査により、第Ⅲ様式及び第Ⅳ様式の土器を

伴う包含層からの出土であることが判明した。長さ5.6cm、鍬身の横断面が菱形で、逆刺の小さい凹基式有茎鍬である。

### 6. 長浜市鴨田遺跡<sup>⑧</sup>

大型の銅鍬が1点出土している。逆刺が非常に長く、鍬身に3個の孔が並列して穿たれている。わずかに鍬柄があって、横断面は菱形に近い。当遺跡では、大小多数の溝や沼沢地状のものが検出され、それらの埋土中より、弥生時代中期から古墳時代中期にかけてを中心とする多量の遺物が出土している。銅鍬は、沼沢地状の溝Aとされているところより出土しているが、溝Aからの出土遺物も同様に相当な時期幅を持っており、厳密に時期決定をすることは困難である。ただ、銅鍬が逆刺の非常に発達した形態であり、むしろ、古墳時



図1 近江銅製品出土遺跡位置図

代鉄鏃に近似したものがあるところから、弥生時代でも、さほど、さかのぼるものではなからう。

### 7. 長浜市十里町遺跡<sup>⑧</sup>

長さ3.9 cmの、凹基式有茎鏃が1点出土している。逆刺はやや発達し、鏃身は二等辺三角形形状で、鏃を持つ。この銅鏃は、発掘調査中に表採されたものであるが、調査の結果では、弥生時代終末期の高杯、あるいは、「欠山期」または「庄内期」に並行する土師器が出土している。

### 8. 滋賀県伊香郡出土「村名未詳」の銅鏃<sup>⑨</sup>

昭和12年3月頃に東京帝室博物館に寄贈されたものであるが、伊香郡出土とされるだけで、出土地の詳細、出土状況等は不明である。現存長16.47cm、現重量20.5 gを計る。二等辺三角形形状のものが4個直線状に連結した状況にあるもので、「一度の鑄造で複数の銅鏃を生産した一種の量産形態を示す遺物」とされ、弥生時代後期の銅鏃の半製品といわれている。

### 9. 「近江国発見鏃」とされる銅鏃<sup>⑩</sup>

農商務省博物館が明治16年7月31日に購入した銅鏃で、近江で発見されたいという事以外に詳細は明

らかでない。現存長23.1cm、現重量25 gを計り、伊香郡某出土品と同様に、二等辺三角形形状のものが6個直線状に連結したもの。やはり、銅鏃の量産形態を示す半製品で、弥生時代後期のものと考えられている。

### 10. 余呉町桜内遺跡<sup>⑪</sup>

北陸自動車道建設工事に伴い、現在発掘調査が実施されている。これまでに判明していることは、遺跡が約30,000㎡に及び、遺構が上下2層(部分的に3層)にわたり分布している等の点である。特に、下層遺構は、遺跡範囲の北西部に方形周溝墓群があり、他の地域に竪穴式住居跡群が検出されている。詳細な整理作業は実施されていないが、およそ、弥生時代後期を中心とする遺物が出土している。銅鏃は、下層遺構の検出過程、あるいは、下層遺構と同時期の溝状の遺構から出土している。従って、整理作業が進行すれば、共伴遺物から、銅鏃の時期を決定することが可能であるが、一応、後期として大過ないものと思う。

さて、銅鏃は12本出土している。この本数は、弥生時代遺跡では、鳥取県中茶屋遺跡の15本に次ぐものようであり、次いで、愛知県保美平城遺跡の9本が

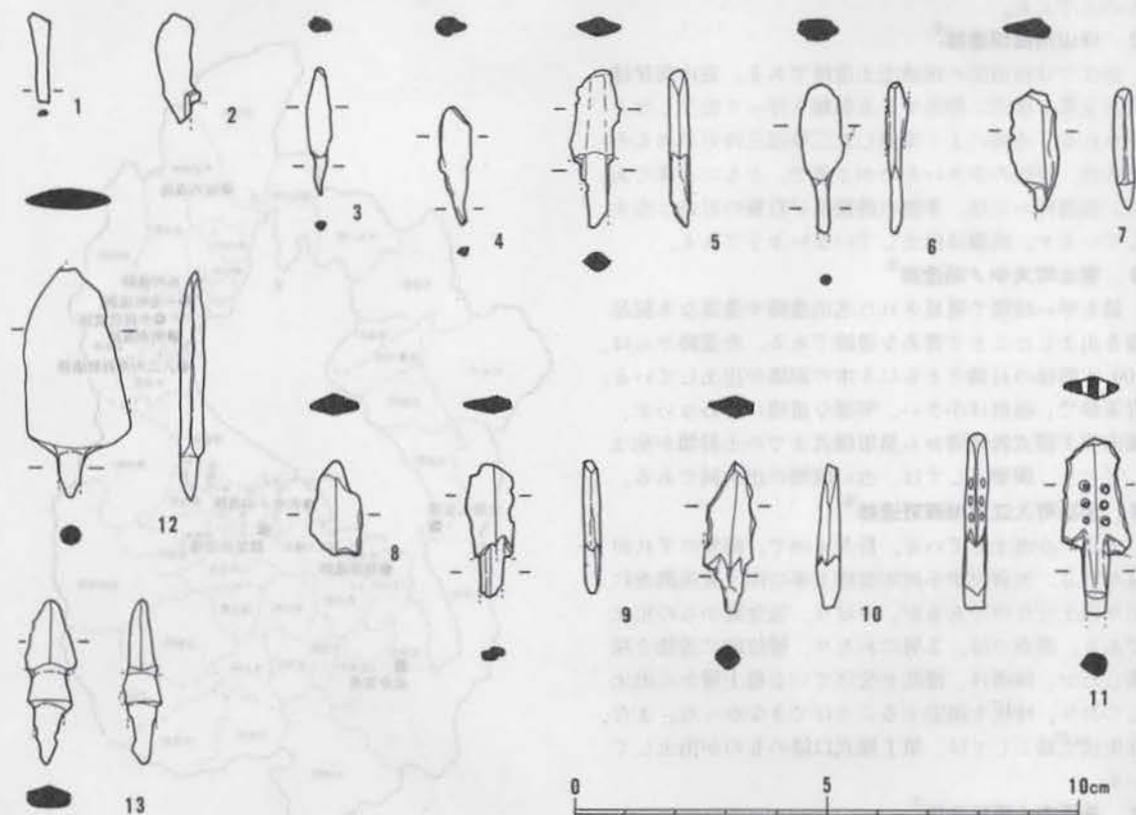


図2 余呉町桜内遺跡出土銅鏃

知られているが、大半が1本程度の出土であることと比較すると、極めて多数の出土といえることができる。形態的には3種類あるが、12本中10本までが、凹基式有茎鍔で、逆刺は小さく、鍔身に鑄があって、横断面菱形を呈する。この形状のものには、3個の孔が並列して穿たれているものが1点見られる。磨減、欠損がはなはだしく、完存するものはないが、現存長で1.9cm～3.1cmを計る。のこる1点は、筥被の見られるものである。鍔身は欠損が激しく、明確でないが、古墳から出土する柳葉形の鍔身に筥被のつくタイプに近似している。他は、鍔身だけの長さ3.5cm、幅2cmの大型で凸基式の有茎鍔である。鑄はなく、厚さ0.4cmと扁平である。なお、当遺跡からは、石鍔は、打製の凹基無茎のものが1点のみ出土しているにすぎない。またその形態から中期にさかのぼるようであり、従って、後期に入る鍔類は、現在のところ銅鍔のみということになる。

#### 11. おわりに

以上が近江における銅鍔出土遺跡及び遺物の概略である。明確な遺構や単純な遺物包含層からの出土ではないが、伴出する遺物から、大中ノ湖遺跡が前期末から中期中頃、大辰巳遺跡が中期後半、服部遺跡が中期後半から後期、桜内遺跡が後期、鴨田遺跡が後期から古墳時代前期の銅鍔とすることができる。これらの資料だけで形式変遷に触れることはさけるが、現在のところ、すべて有茎であり、桜内遺跡の2点、大中ノ湖遺跡を除けば、いずれも凹基式である。また、逆刺のよく発達した二等辺三角形形状のものと、逆刺の小さい、柳葉形に近い形態のものがあるが、服部遺跡では5本の銅鍔のうち、2本は前者、3本は後者の形態を取り、大中ノ湖・大辰巳遺跡のものは後者の形態を取る。さらに、桜内遺跡からは、古墳出土のものに多く見られる筥被のある銅鍔が出土している。

次に、分布上の特徴として、すでに明らかのように近江の北部を中心に出土していることが知れる。このことと、伊香郡某の「村名未詳」の半製品が出土していることと不可分の関係にあるものと思われる。また近江における弥生時代銅製品の一つである銅鐸が中期後半を中心に、大津市、草津市、守山市、野洲町、竜王町で、明確に分布域を異にしている<sup>13</sup>ことも興味ある事実といえよう。特に、近江の銅鍔は、多くが後期に入るものと思われ、銅鐸が姿を消す頃、湖北を中心に、伊香郡「村名未詳」の半製品が示す量産体制のもとに、銅鍔が生産されている傾向を伺い知ることができると思う。

弥生時代における近江は、その北部と南部とでは様相を異にするようである。たとえば、磨製の石鍔は、畿内北部における弥生時代中期後半を特徴付けるもの

とされているが、近江の西・南地域に有茎のものが多いのに対し、東・北地域では無茎のものが多く指摘されている<sup>14</sup>。中期における近江の北部と南部の相違は弥生文化の伝播経路とおおに関係するのであるが銅鍔においても、桜内遺跡や鴨田遺跡に見られるような、鍔身に円孔を穿つ例は、古墳時代のものであるが、岐阜県稲葉郡北一色古墳、さらには、東海地方に比較的よく見られる<sup>15</sup>。また、銅鍔の分布においても、近江南部から山城にかけては非常に少なく、尾張、すなわち東海地方から近江湖北にかけて、一つの大きな分布地帯を想定することも可能であろう。弥生時代後期には、いわゆる東海系の「S字状口縁」甕形土器等東海系の遺物がよく流入しており、銅鍔の北部における密な分布も、これら一連の文化伝播との関係の上で把握できる。ただ、銅鍔そのものの生産に関しては、「伊香郡某村」出土等の存在するところから、在地において生産された可能性が非常に強い。銅鍔は、他の銅製品と異り、愛知県西志賀貝塚<sup>16</sup>や長崎県平戸根獅子免出土例のように膝関節、あるいは頭蓋骨に打ち込まれて出土しており、実用品と考えるべきものであり、特に、弥生時代後期においては、石鍔の消滅とともに鉄鍔の普及が考えられるのであるが、いわば、鉄鍔の補足的な立場にあるものと考えてよかろう。それは、「伊香郡某村」出土例が示すように、まさに、量産体制を示すような半製品がそのことを物語っているものと考えられる。また、桜内遺跡においては、石鍔はもちろん、鉄鍔の出土はなく、逆に、銅鍔の出土量が多い点、鉄鍔の補足という以上の立場にあったのかもしれない。

(田中勝弘)

#### 注

- ① 地名表№12
- ② " №10
- ③ " №11
- ④ " №9、及び、大橋信弥氏の御教示による。
- ⑤ " №8
- ⑥ " №7
- ⑦ " №6
- ⑧ " №5
- ⑨ " №4
- ⑩ " №2
- ⑪ " №3
- ⑫ " №1。北陸自動車道建設工事に伴い、昭和52年度より発掘調査を実施しており、現在、第5次調査を実施中である。
- ⑬ 葛野泰樹「〈特集〉近江出土の銅鐸」(『滋賀文化財だより』№29、昭和54年)
- ⑭ 『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会、昭和48年)

⑮ 森本六爾「日本銅鐵聚成表」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第7冊、大正11年)

⑯ 藤沢一夫「尾張西志賀発見の銅鐵」(『考古学』第5巻第4号、昭和9年)

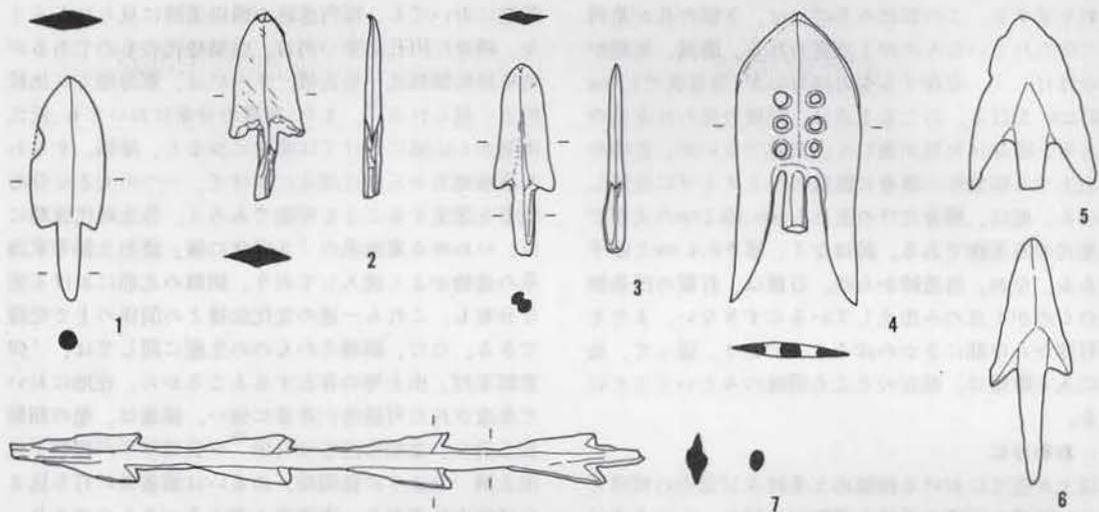


図3 近江出土の銅鏃(1.大辰巳遺跡, 2.十里町遺跡, 3.西野遺跡, 4.鴨田遺跡, 5-6.服部遺跡, 7.伊香郡某) 縮尺は1-3・5・6は $\frac{2}{3}$ , 4・7は約 $\frac{1}{2}$ , 5・6は写真をトレース

滋賀県銅鏃出土地名表

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	個数	時期	文献
1	桜内遺跡	伊香郡余呉町坂口桜内	包含層・溝	12	弥生後期	本書
2		伊香郡某所		1	弥生後期	本村豪章「近江出土の異形青銅器」(『考古学雑誌』63-3, 昭52)
3		近江国某所		1	弥生後期	同上
4	十里町遺跡	長浜市十里町十五坪	表採	1		『宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書』(長浜市教育委員会, 昭52)
5	鴨田遺跡	長浜市大茂亥町	包含層	1		『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会, 昭48)
6	大辰巳遺跡	長浜市大辰巳町	包含層	1	弥生中期後半	小江慶雄「長浜平野における弥生式文化の展開」(京都学芸大学学報第7号)
7	入江内湖西野遺跡	坂田郡米原町磯西野	包含層	1		『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会, 昭52)
8	大中ノ湖遺跡	蒲生郡安土町下豊浦菰刈	包含層	5	弥生中期前半	『大中の湖遺跡』(滋賀民俗学会, 昭43)
9	服部遺跡	守山市服部町		5	弥生中-後期	『服部遺跡発掘調査概要』(滋賀県教育委員会, 昭54)・大橋信弥氏御教示
10	追分古墳	草津市追分中尾	円墳	10数		『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』(滋賀県史・名・天調査会, 昭11)
11	大塚山古墳	滋賀郡志賀町小野山	前方後円墳	5		梅原末治「近江和邇村の古墳墓一特に大塚山古墳について」(『人類学雑誌』37-8, 昭 )
12	瓢箪山古墳	蒲生郡安土町宮津	前方後円墳	30		梅原末治「安土瓢箪山古墳」(『滋賀県史蹟調査報告書』7, 昭13)